

会員から

中洞牧場のフードチェーン開発

筆者は1977年春に東京農業大学を卒業した。以来一貫して山地酪農（やまちらくのう）を続けて現在まで34年の歳月を山地酪農家として心血を注いできたつもりである。山地酪農とは戦中、当時の東北帝国大学で植物生態学・社会学を研究した猶原恭爾博士によって提唱された山地放牧の酪農形態である。猶原博士は自らの研究をいかに実践的に国家国民社会に役立てようとする打算の全くない真摯な学者であった。あくまでも実践的学問にこだわり自らも10年間にわたり牛を飼って酪農家として現場での研究を続けその生涯を山地酪農に捧げた稀有な学者であった。

山地酪農の最大の特徴は日本在来のシバ草地の放牧地にある。このシバは移植して放牧地に蔓延る（はびこる）まで数年の歳月を要するが一旦全面積に蔓延ると頭数と面積のバランスを保っていれば無施肥でも半永久的に同じ植生を維持できるのである。国土の7割にも及ぶ山地地帯には無尽蔵の草資源（木の葉・笹なども含む）があり、これらを活用するのが我々の酪農手法である。

中洞牧場では現在50haに約70頭の乳牛を飼育しており、その内16haの山林も放牧地として活用する林間放牧を行っている。林間放牧地には唐松や杉の植林地・水源涵養のブナ林・薪や木炭を取る薪炭林・またミツバチも飼い蜂蜜も採取している。林間放牧地は逐次間伐を進めその、間伐材は炭窯を作り木炭の生産をしている。間伐することによって林床に日が差し明るく見通しのきく美しい林になり頻繁に訪れる見学者の心を和ませてくれるという相乗効果も生まれている。これは牛による下草の採食活動の成果である。

当牧場では諸般の事情から2009年より製品の販売を休止していたが1昨年秋より東京のIT企業「株式会社リンク」の協力を得て再度牛乳・乳製品のプラント建設を行っている。本来は3月末に完成予定ではあったが年末年始の豪雪、3月の震災の影響でやっと7月上旬に完成する予定である。完成後は試作を繰り返し、商品開発をして8月までには何とか販売にこぎつけたと思っている。輸入飼料を一切使わずシバをはじめとする自然の草を餌とする通年昼夜放牧・自然交配・自然分娩・自然哺乳という、これまで30数年に渡って構築した技術を基に最も自然な牛乳を世に出したいと考えている。

具体的な販売は東京・六本木に直営店を設け、牧場で生産された乳製品をはじめ林間放牧地から取れる木炭や薪・山菜やキノコ・蜂蜜、また牧場内の畑で栽培している無施肥・無農薬の野菜などを販売する。東京で丸ごと中洞牧場を体感できるように考え販売も筆者を含めスタッフ全員が輪番制で当たりたいと思っている。牧場のスタッフと消費者が直接交わることで生の牧場の情報をリアルタイムに伝えていきたい。そのことによって牧場の生産ポリシーが理解され、商品の価値向上に繋がると確信している。

幸いにもEUが先鞭を切った家畜福祉という概念も我が国にも少しずつではあるが浸透しつつある。また日本獣医生命科学大学をはじめ全国4大学に山地酪農研究会という学生サークルが結成され50名前後の学生が山地酪農を学び始めている。微風ではあるが確実に追い風を感じている昨今である。

(山地酪農家・㈱山地酪農研究所代表取締役所長、元東京農業大学客員教授 中洞正)